

自然談話コーパスにおける「のだ」構文の特徴

北野浩章

東北大学大学院国際文化研究科 ● kitano@intcul.tohoku.ac.jp

1. はじめに

本研究の目的は、「のだ」構文を手がかりに、コーパスの種類が違えば、同一の構文が、意味・機能に関して違った様相を呈することがありえる、ということを指摘することにある。

次節では、田野村(1990)を参考に「のだ」構文の基本的な特徴を概観する。第3節では、話し言葉に現われる「のだ」構文の特徴を指摘する。第4節では、話し言葉、書き言葉、内省によるデータなど、データの違いが「のだ」構文の研究とどう関係するのかを考える。

2. 「のだ」の基本的な特徴

「のだ」の基本的な意味・機能は「あることがらの背後の事情を表わす」ことであると考えられる(田野村 1990: p.5; 田野村氏は「のだ」構文の様々な形式-「のか、のだろう」など-に共通する核となる部分を「のダ」と表記されているので、本稿でもこれに従う)。次の例で、

(1) 今日は休みます。体調が悪いんです。

「今日は休む」(α)ということの背後にある事情が「体調が悪い」(β)ということであり、それが「 β のダ」によって表わされている。

ところで、「実際には、「のダ」を含む文でも、上の説明において α としたことがらを具体的には特定しがたいことも少なくない」(p.6)。たとえば次の例で、

(2) 血液型は何型ですか？

ーわたしはAB型なんです。

「ある具体的なことがら α を受けて、その背後には自分がAB型だということ(β)があると述べているものとは言いがたい」(pp.6-7)。このような、具体的なことがらを受けない「のダ」の用法は「ある実情」を表わす、とされている。

田野村氏はまた、「のダ」の基本的な意味・機能から出てくる派生的な4つの意味特性・使用条件を挙げている(pp.8-13)。

- ①承前性：「のダ」を含む表現は、言語的な文脈に現われたことがらや会話の状況中の非言語的なことがらを受けたうえで発せられることが多い。
- ②既定性：「 β のダ」の β は、すでに定まったことがらであることが多い。
- ③披瀝性：背後の事情、実情といったものは、一般に、すべての者には容易には知り得ない種類のことがらである。
- ④特立性：「のダ」は、一つの可能性をほかの可能性から区別して問題とする場合に特徴的に使用される。(たとえば、「(β' や β'' ではなくて) β なんです」というように)

以上の研究成果を踏まえて、次節で話し言葉における「のダ」を観察する。

3. 自然談話に現われる「のだ」構文

本研究で用いた話し言葉のデータベース(18のトランスクリプトからなり、計約90分)で、「のダ」

は 532 例あった（接続助詞的に用いられる「ので」「のに」を除く）。音韻面では、「のだ、のです」のように「の」にコピュラが続くと必ず「んだ、んです」となる。「の」単独、あるいは終助詞「ね、よ」などが続く場合のみ「の」で現われる。すなわち、「のだ」構文は、話し言葉では「のだ」という形では現われない。

データを観察してみると、上に挙げた意味特性のうち既定性、披瀝性が顕著な例が多いことがわかる。特に、話し手のみが知っている情報を一方的に与えるような場面では、「のダ」はほぼ必須の要素である。

(3) (人気のラーメン屋の話)

でだいたいじゅういー、
10時半かな、
11時ぐらいからオープンで、
3時ぐらいまでなんですよ。

(4) ... あたしなんかね、
... ダメなのよ電話って、

(5) うちのお父さんも、
あたし、
胃を丸ごと m... 切った時、
見たもん、
見るじゃない？

(聞き手: ... 胃を?)

.. ってゆうか、
もう本当に、
手術した人って、
その、
.. 取った部分って、
.. 家族に見せるのよ。

ただし実際には、「のダ」によってマークされる情報が既定であるとか、聞き手には知り得ないもので

あると、はっきり言える例ばかりではない。次の例は、主観的な内容の発話に「のダ」を使って、あたかも既定であるかのような印象を与えている。

(6) あの人さ、
たまんないんだよなほんと、
... 最低。

したがって、「のダ」の使用と既定性、披瀝性の間には必然的な関係はなく、ただ、強い相関性がある、と言えるにすぎない。

逆に「のか」など、「のダ」の疑問文については、「相手に尋ねなくては答の知りようがないようなことがらを尋ねているという印象を与えることが多い」（田野村 1990: 60-1）という記述が、話し言葉においても当てはまる。ただ、疑問文はそもそも話し手の知らない情報を引き出すものだから、「のダ」がなくても可能なこともある。

(7) そ- それでそのあとどうしたの?
写真撮ったあとは、

(8) どうゆう話が、
.. だったんですか?
.. どんな話をする、
いやなんですか?

一方、承前性、特立性は、話し言葉ではそれほど顕著ではなく、例も少ない。(9)は承前性、(10)は特立性の含みが感じられる例である。

(9) (研究が国内で認められるだけではだめで、広く国外にも普及させるべきだという話を受けて)
... そうか。
... そのためにはやっぱり、
英語でのパブリケーションってのは、
大事なのね。

(10) (食道にできたポリープの話)

うん。

.. さんp- 一個できたんじゃないんだよ。

.. もいっぱいできちゃったの。

...(7) で胃カメラでこう通して見るじゃない？

... それ=、

... いっぱいできちゃったの。

承前性、特立性は、((1)のような)単純な文脈を想定すればわかりやすいが、複雑な自然談話では現われにくいようである。

それでは、「背後の事情」「ある実情」といった基本的な意味・機能はどのように現われるのか。ここで、田野村(1990)に戻って、「背後の事情」用法と「ある実情」用法の関係を考えてみよう。

(「ある実情」の用法は、)あることがらを受けてその背後の事情を表わすとした上述の一般化には無縁であるかと言うと、そうではないであろう。むしろ、背後の事情を表わす用法における α がその内容の具体性を失ったところに成立し定着しているのが、この用法であろうと思われる(...)この種の「 β のダ」の用法においては、すべてのものには必ずしも容易には知り得ないにせよ、すでに定まっていると想定される事情 α が話し手の念頭に問題意識としてあり、それが β である(かどうか)ということが問題とされている(...) α が具体的なことがらとしては存在しないにしても、そうした事情 α がどのようなものであるかという問題意識があり、それに応じる形で β ということが問題とされているわけである。(pp.7-8; 下線は北野)

ここでは、「背後の事情」が基本的であり、「ある実情」は派生的と考えられている(下線部参照)。だが、自然な話し言葉の談話においては、「背後の事情」の先行文脈となるあることがら α が具体的には特定できない例が多い。ただ、「ある実情」の用法を認めることはできるかも知れない。たとえば(4)

では、話し手が電話をかけるのが嫌いだという個人的な事情が、ここでの談話の主題となっている。「話し手の問題意識」が談話の主題と一致するなら、「ある実情」の例はかなり多いと言える。

4. 話し言葉・書き言葉・内省データ

話し言葉と書き言葉の違いについては多くの指摘がある(たとえば英語に関しては Chafe 1994, Ochs 1979, Pawley and Syder 1983, Tannen 1982 など)。日本語の話し言葉の一般的な特徴として、①言い誤り、言い直し、言い換え、言い淀み、繰り返し、(助詞などの)脱落/省略、②終助詞、間投詞などの話し言葉特有の語、③比較的単純な統語構造、などがしばしば挙げられる。

一方、内省データ(ここでは言語学者の作例によるデータという意味で用いている)は、話し言葉の影響もあるが、主に書き言葉の影響が強いと言える。生成文法に代表されるように、理論を構築し、検証するために内省によるデータを利用する場合もあるが、本稿で問題にしたいのは、言語形式の意味・用法を精緻に記述するための内省データの利用である。その際、ミニマル・ペアを作って、形式Aのあるなしでどういう違いが出るか、とか、形式Aと形式Bを比較したりするという方法が通常とられる。この方法は、たとえて言えば、実験室で不純物を取り除いて純度の高い物質を抽出しようとするのに似ている。だが、そこで得られた結果が、自然談話のデータとあまり合致しない場合もありえよう。

前節で見たように、「ある実情」用法より基本的とみなされている「背後の事情」用法は、種々雑多な談話的要因を排除し、内省を駆使して抽出されたものであり、一方、「ある実情」用法というのは、「あることがら α 」が明確に存在しない場合であるから、より弾力的な「 β のダ」の使用といってもよいかも知れない。つまり、「 β のダ」には核となる用法が存在するが、実際の運用はもっとゆるやか、という

わけである。

一方、言語使用を重視する立場、とりわけ、生成文法で言う「言語能力」(competence)と「言語運用」(performance)の区別を前提としない立場からすると、むしろ「ある実情」用法の方が話し言葉のデータにおいて普通であることから、「背後の事情」用法が、多様な「のダ」の現われの中でむしろ特殊なものではないか、という可能性もある。

5. おわりに

同じ文法形式・構文が、用いるデータによって少しずつ違った形で現われうる可能性を、「のだ」構文を例に論じた。こういった違いは、他の形式・構文にも見られることが予想される。

今日、言語研究におけるコーパスの重要性は言うまでもない(田野村 1995)。これまでの記述的な文法研究は、書き言葉または内省によるデータをもとになされてきて、話し言葉にはほとんど注意が払われていない。文法が「言語能力」としてヒトに生得的に与えられたものではなく、「談話(≡言語使用)が文法を作る」("Discourse shapes grammar")という仮説(Givón 1979, Hopper 1988 など)に立つと、話し言葉のコーパスが、狭義の談話研究だけではなく、文法研究一般においても今後重要なものになってくる。

謝辞

本稿で用いた話し言葉のデータベースは、大野剛、鈴木亮子、中山(市橋)久美子、中山俊秀、Pat Mayesの各氏、および筆者自身によって録音、文字化されたものである。データの使用を許可された各氏に感謝したい。なお、もとはローマ字表記のトランスクリプトを、本稿では筆者が漢字仮名まじりに書き改めた。

文字化の際に用いた記号 (Du Bois et al. 1993) :

...	(秒数)	長いポーズ (0.7 秒以上)
...		中位の長さのポーズ (0.3-0.6 秒)
...		短いポーズ (0.2 秒以下)
=		長音化
-		語の中断
--		intonation unit (Chafe 1994) の中断

参考文献 :

- Chafe, Wallace. 1994. Discourse, consciousness, and time: the flow and displacement of conscious experience in speaking and writing. Chicago: University of Chicago Press.
- Du Bois, John W., Stephan Schuetze-Coburn, Susanna Cumming and Danae Paolino. 1993. Outline of discourse transcription. Talking data: transcription and coding for discourse research, ed. by Jane A. Edwards and Martin D. Lampert, 45-89. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Givón, Talmy. 1979. On understanding grammar. New York: Academic Press.
- Hopper, Paul J. 1988. Emergent grammar and the a priori grammar postulate. Linguistics in context, ed. by D. Tannen, 117-34. Norwood, NJ: Ablex.
- Ochs, Elinor. 1979. Planned and unplanned discourse. Syntax and semantics vol.12: Discourse and syntax, ed. by Talmy Givón, 51-80. New York: Academic Press.
- Pawley, Andrew and Frances H. Syder. 1983. Natural selection in syntax: notes on adaptive variation and change in vernacular and literary grammar. Journal of pragmatics 7.551-79.
- Tannen, Deborah. 1982. Oral and literate strategies in spoken and written narratives. Language 58.1-21.
- 田野村忠温 1990.『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』大阪:和泉書院.
- 1995.「日本語研究の限界」『日本語学』5月号, 80-8.